

「神道と国家神道」

2016年05月31日

『週刊金曜日』の1089号は「日本会議」を特集している。日本会議は「明治憲法の復元」を目指す、日本最大の右翼団体で、神社本庁、諸宗教団体、文化人、財界人などが加わった「統一戦線」である。特集の中で、愛知県の清州山王宮日吉神社の三輪隆裕宮司のインタビューが掲載されている。宮司であるが、認識と論理は胸がすくような主張である。

問－日本会議と密接な宗教法人の神社本庁もそうですが、天皇の価値を強調し「国民統合の中心」に置こうとするのは「伝統」だから、という論理なのでしょうか。答－「いえ、それは『伝統』ではありません。江戸時代にはごく一部の知識階級を除き『京都に天皇様がおられる』ということを知っていたか、はなはだ疑問です。… 明治になって、日本という統一国家ができたので、その象徴として『天皇を』を据えたのです。」庶民は天皇を知らなかった。写真を作り、全国にばらまいて「天皇」を知らしめたのである。

問－「天皇のために死んだ」とされる人々だけを祀る靖国神社は「伝統」でしょうか。答－「一神教では『神と悪魔』がいて、敵と味方を峻別します。しかし多神教の神道は、もともとそうしたことはしません。… 西欧文明を受容し、富国強兵を目指した当時の日本は、国のために死んだ人々を神々として祀り、戦死を美德とする必要があったのです。」靖国神社は戦争を推進、美化するために作られた官制神社であった。

問－なぜ、神道にとって伝統でないものが「伝統」にされたのですか。答－「そのポイントは、明治という時代にあります。江戸時代からの神官たちは明治になって、社領を政府に取り上げられ、一部を除き、廃業してしまいました。そして神社は、土地も建物も国有化され、宗教から外されたのです。」今は、「神官」ではなく「神職」と言っている。

問－明治時代に強くなったのだから、日本会議のような右派は「栄光の明治」と呼んでいます。答え－「たまたま日清・日露戦争で勝っただけです。私に言わせれば、明治政府は文化と宗教の破壊者です。… 神道を宗教から外して、国民の精神を高揚させるための手段とし、神社から宗教色を取り除こうとしたのです。これが文化破壊です。」

問－明治維新後の廃仏毀釈ですね。答－「明治政府が考えた対応策が『神社は宗教ではない。国家儀式を司る機関である』という、『国家宗祀』理論です。… 『宗教ではない』からと、神社の宗教行事まで禁止したのです。儀式だけやれと。布教もダメで、それに変わって、国家が国民教化のために作ったのが『教育勅語』だったのです。」神道は国家管理の中に飲み込まれ、神道本来の宗教性を奪われてしまったのである。

問－国家神道は、神道の歴史ではきわめて特殊だと。答－「それが、今の神社神道には理解できないのです。戦後、占領軍の『神道指令』で国家神道は解体されました。… 明治政府が作った神道が『伝統』だと思ってしまった。その感覚が、戦後70年経ってもまだ残っているのです。」伝統は3日前に作っても伝統と言い張れば伝統になってしまう。

問－だから今日も、過度に「天皇の価値」を強調するのでしょうか。答－「天皇を頂点とした一種の家族主義的国家観、『国体』観が明治以降、国民の意識に植え付けられましたからね。… 家族主義を拡大すると、権威主義や全体主義となります。… これが一番危険です。戦前のファシズム、あるいは共産主義もそうです。カルト宗教なんかも同じです。」

問－改憲をどう考えていますか。答－「日本の独自性とか、妙な伝統とかいったものを振りかざして、現代の人類社会が到達した価値を捨ててしまう可能性があるような憲法なら変えない方がよい。… 私自身、右でも左でもないリベラリストだと思っています。似たような考えの人は他にもいますよ。」